COBALT-SERIES

Oh! Boy

ハートがじりじり

宮沢ぷりん

集英社

みやざわ・ぷりん

兎年5月3日生まれ。牡牛座、A型。神奈川県在住。大学卒業後、雑誌のライターを経て、今回初めて文庫デビュー。趣味は音楽鑑賞で、好きなミュージシャンはプリンスとチャーとジェームズ・ブラウン。特技は何時間でも眠ること。最高記録は21時間。今年は山にこもり、この記録更新にチャレンジする予定。また、あざらしのように太ったチワワを飼っていて、毎日の散歩が日課。

Oh! Boy ハートがじりじり

COBALT-SERIES

1992年3月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　宮沢ぷりん
発行者　若菜正
発行所　株式会社　集英社

〒101-50
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
電話　東京　(3230) 6268 (編集)
(3230) 6393 (販売)
(3230) 6080 (製作)

印刷所　図書印刷株式会社

© PURIN MIYAZAWA 1992

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611623-5 C0193

COBALT-SERIES

Oh! Boy ハートがじりじり

宮沢ぷりん

集英社

目次

Oh!Boy ハートがじりじり

1 地上げ屋奇襲作戦 …… 5

2 南の島は恋も遊びも命がけ …… 39

3 友達以上、恋人未満 …… 85

4 女子大生のお姉様 …… 117

5 ずっとこのままそばにいて …… 167

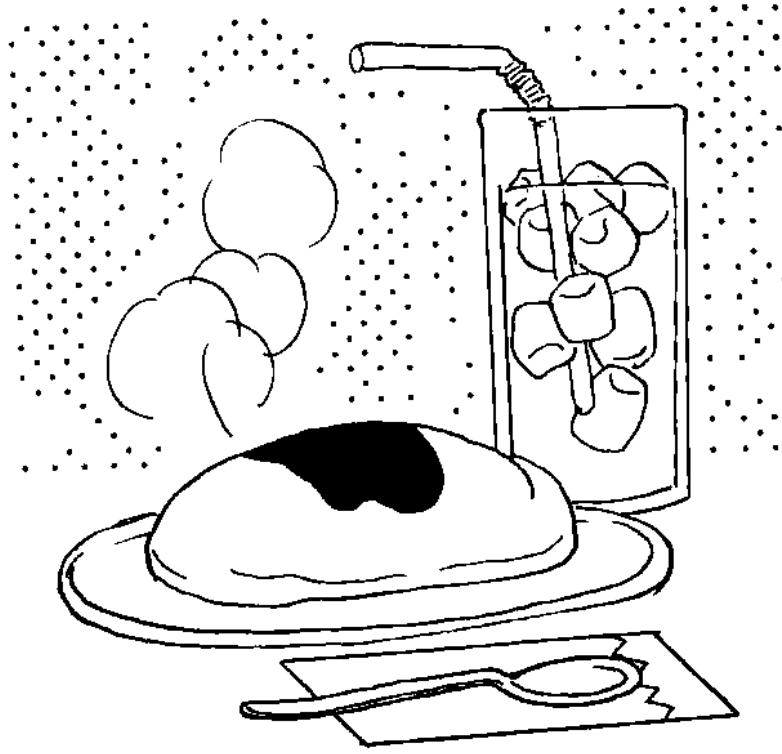
あとがき …… 197

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

イラスト／春日るりか

1

地上げ屋奇襲作戦



「ユウちゃん、ちょっと待ってー！」
美里が校門からのなだらかなスロープを息を切らして降りてきた。
下校途中の男子生徒が一斉に声のするほうを注目する。
美里はそんなことをまるで気にもとめないような素振り。
ポニーテールをピョンピョンと左右に揺らしながら僕の所まで走ってくると、持っていたカバンを左手に持ち替えて、僕の右側にピッタリとよりそうようにして並んだ。
美里はなにを隠そう我が城南高校のマドンナ。
牧瀬里穂と鈴木保奈美をたして2で割ったような女の子で、ハッキリいってそこらへんのアイドルタレントなんて〝けっっ！〟って笑っちゃうくらいのできばえなんだ。
美里のことは学校中の男子が狙ってるし、近くの男子校ではブロマイドが売られてるって、もっぱらのウワサだもんな。
でも当の本人はその気がちっともないらしい。
いままで特定のヤツとつきあったことがないっていうのも有名な話。
そんな彼女がこうして僕の隣にいるのは、ただ家が近くって、幼馴染である、という以外、なんにも理由がなかったりするわけで、学校中のみんなだってそのくらいのことは知っている。
でも僕のことを〝ユウちゃん〟なんて子どものころの愛称で呼ぶのは、この学校では彼女ひ

とりだし、こんなに大勢の野郎たちの視線の中で彼女を独占するのはなかなかの快感。
僕はちょっと鼻高々だった。
「ねぇ、今日は部活ないんでしょ？　うちに寄ってけないの？　ちょっと相談したいことがあるんだけど」
と、美里は僕の顔をのぞき込むように見た。
おおっと！
いきなりのどアップだぜ。
思わず視線をそらしてしまう。
じつは美里の家は喫茶店をやっていて、僕たちラグビー部のたまり場みたいになってるんだ。
「わりィ、わりィ。今日さ、ちょっと歯医者に行かなくちゃなんないんだよ。ほら、駅前の前田医院ってあるじゃん。あそこ」
「ふーん……。前田医院って、すごい美人の先生がいるところでしょ？　あの人目当てでかよう患者さんも多いらしいよ」
一瞬、黙ってしまう僕。
ったく。女って、こういうところが鋭いからやなんだよ。
「うちのおじいちゃんなんて虫歯もないのに〝歯が痛い〟とかいっちゃって、毎日かよってた

ことあるんだから。私は前のおじいちゃん先生の方が好きだったな。あのおじいちゃんの娘なんだってね、今の先生」

「へぇー。それよりブスな看護婦がいるじゃん。あっちのほうがキョーレツだよ。年のくせにミョ〜に若作りなんだよな、あのババア。アハハハ」

笑ってごまかそうとしたけど、

「そんなにおかしい？」

と冷たいひとこと。

そんなに人を自己嫌悪のドンゾコに突き落とすようないい方しなくったっていいのに。

うろたえる僕にはおかまいなしに、美里は友達を見つけると、

「じゃあね、またあした。バイバイ！」

と走って行こうとした。

そんならお返しだぜ。

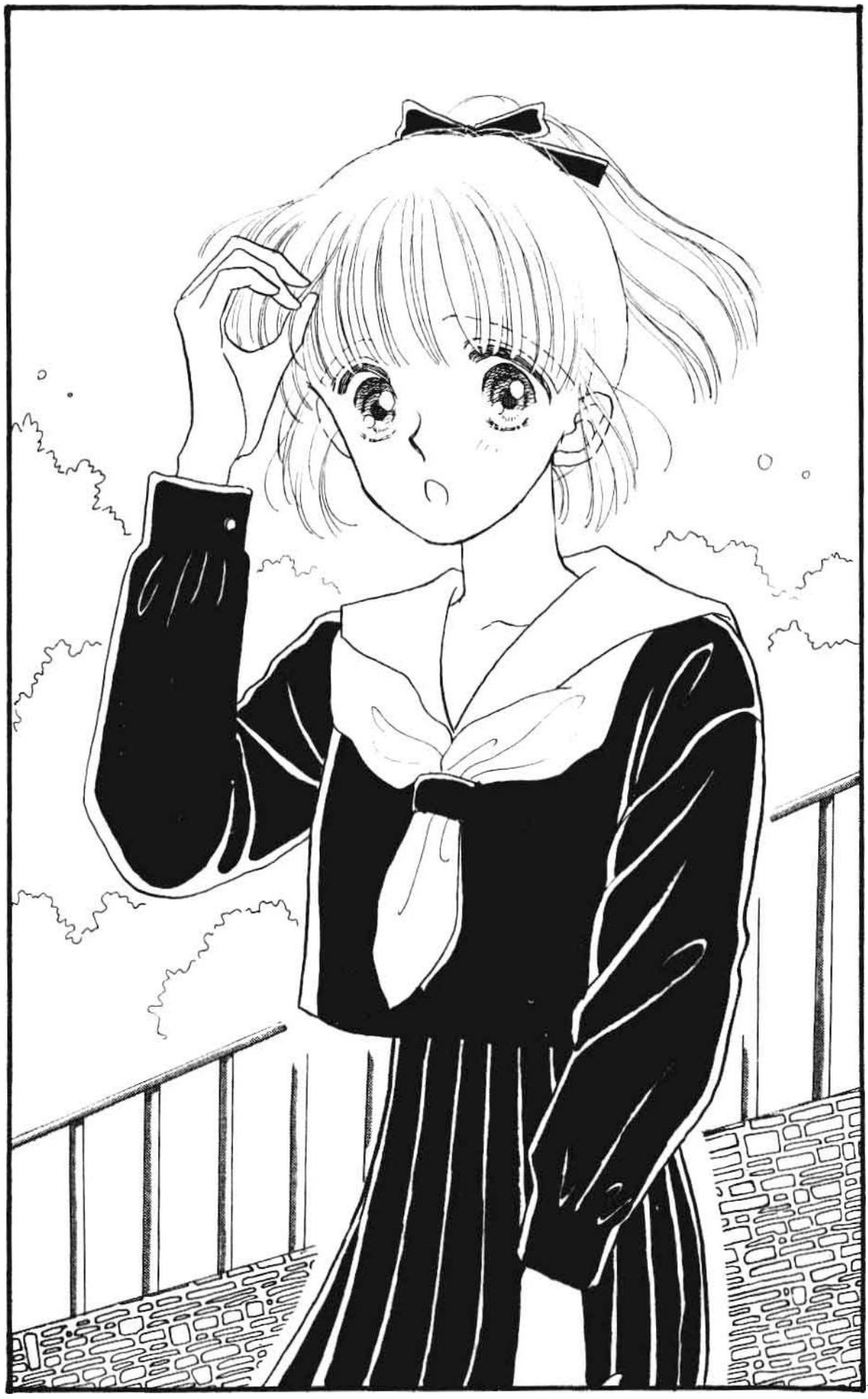
「おい、マユ毛見えてるぜ」

「えっっ!?」

急に立ち止まる美里。

真っ赤な顔をしながら手で前髪を降ろした。

どういうわけか知らないけど、ちょっと下がりぎみのマユ毛が大嫌いらしい。



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

いつも前髪でシッカリかくしているんだ。
僕は個人的には彼女の顔の中では一番気にいってたりするんだけど。
「見えてない？」
「うん」
「じゃあね」
美里の後ろ姿を見送りながら、駅の方へとかどをまがり、病院へと向かった。
すぐに〝前田医院〟という看板。
本当のところ、美里のいったことは図星だった。
この病院嫌いの僕が、たかだかおやしらずのことで病院に行くのは、美人の前田先生の顔を拝みにいくため。
田中美奈子をもうちょい年とらせて、もっと色っぽくさせた感じで超セクシーなんだ。
小柄だけど、けっこー胸もあるんだよなぁ。
白衣がミョーにエッチっぽくてさ。
そんでもって声がまたいいんだよ。
かとうれいこみたいにちょっとハスキーボイスで。
ちくしょう！
もう結婚してるんだろうなぁ……。

病院に着くとかなりの混雑だった。
あきらかに先生目当てのスケベそうなオヤジもいたけど、大半が小学生のガキ。
待合室の本棚からは、すっかりマンガが姿を消していた。
しかたねぇな。
残っていた週刊誌を手にとると、長椅子のはしっこに座って読み始めた。
おっ、やりぃ。
いきなりのヌードグラビア。
これなら1時間以上待たされたって、ぜんぜんOK！
Everything all right だぜ。
ところが、ほんの5分もたたないのに診察室から、
「ユウちゃーん」
という看護婦の呼ぶ声。
〝ユウちゃん〟という呼び方が美里を連想させたけど、似ても似つかない看護婦の顔を思い出し、うぷぷぷと腹をかかえた。
と、まわりからいっせいに冷たい視線がむけられているのに気がつく。
そういえば前に来てた人より先に呼ばれてるような気がする。
僕はみんなの視線から逃れるようにして、週刊誌を持ったまま診察室に逃げ込んだ。

「まあ、ユウちゃん、そろそろ来る頃だと思ってたのよ。お勉強が忙しいと思って順番早くしといたわ」

看護婦は化粧をぬりたくった顔を誇らしげにこっちへ向けてきた。

「は、どうも」

この看護婦は僕が小さい時からいる人で、僕のことをかわいがってくれるのはいいんだけど、ただの親切以上にひいきしてくれることがあって、たまに恐ろしくなってしまうことがある。

深い意味はないと思うんだけど。

「あら、だめじゃないの。診察室への本の持ち込みは禁止って書いてあるでしょう？　まあ、こんないやらしい雑誌なんか読んじゃって。ユウちゃんったらみかけによらずエッチだったのね。ふふふふ」

とうれしそうに体をくねくねさせた。

深い意味があるのかもしれない……。

ゆううつ気分で診察室のイスに座っていると、やっと先生がやってきた。

「あら、裕太くん、ひさしぶりね」

「あ、こんにちは」

「今日はどうしたの？　ちょっと口を開けて。あ、ここね。虫歯になってるわ。これはけずら

なくちゃね。はい、ちょっとそのまま……」
あっという間に虫歯を削りはじめる先生。
違う、違うってば。
おやしらずなんだってば！　と言おうとしても口を開けっ放しだから声もだせない。
キィィィイーン……。
うおおおおー!!　やめてくれーっっ。
この音はマジでダメなんだようっ。
頼む、ダレか助けてくれーっ！
耐えられなくなって、診察台から起き上がろうとしたそのとき。
僕は見てしまった。
なんと先生の白衣から胸の谷間が丸見えになっているじゃないか!!
あうあう……。
全身の力がぬけてくらげ状態の僕。
目だけが胸の谷間にくぎづけになっている。
虫歯を削る音も、ここちよいムードミュージックに聞こえてきた。
ああ。なんて幸せな気分。
だけどちょっとマズイっすよ、先生。

いくらなんでも、こりゃ見え過ぎ。
ヤバイッ。血圧が沸騰しかけてる。
は、鼻血がーっっ！
ドバーッと天井に噴きあげる真っ赤な血!!　……と思った瞬間。
「裕太！　裕太！」
とノーテンをかち割るような怒鳴り声が。
「いい加減に起きなさいって、何度言ったらわかるの！　また遅刻するでしょ!?　あら。また下の電気つけっぱなしにして寝たのね!?　電気代、ただじゃないんですから。ホントにもう……」
これは間違いなくおふくろの声。
気がつくと、なぜか僕はベッドの上。
な、なんで……まさか……ウソだろ!?
あれって夢だったとかぁ!?
ガーンッッ。
でも待てよ。
きのうはたしかに前田医院には行ったんだ。
モーローとしてた頭がだんだんハッキリしてきた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com